イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕 -162号

「サムソンの祈り」

士師記 16 章 28

辻　中　昭　一

士師記の中には、次々と罪を犯して行く民族、個人の姿が描かれている。その中で、私はサムソンの姿に心ひかれる。サムソンの歩みを士師記によって眺めて見る時、肉の人としての側面が、あちらこちらに出ている。そのようなサムソンが祈った時、神はサムソンの祈りに応答してくださった。

1．士師記 15：17 以下　エン・ハコレ（祈る者の泉）

2．士師記 16：23 以下　ペリシテ人への復讐を試みたサムソンに神は力を与えられる。

これらの箇所は、主に祈ることにより、サムソンに畏怖の念、あるいは溢れる感動を与えられた生ける神のみ姿を私たちに教えてくれる。

私たちは、アシュラムにおいて静聴の時を与えられている。定められた時と場所において、私たちは聖書を通し、神のみ声を聴く喜び、感動を与えられるのである。その喜び、感動は、信仰の友らに分かち合う時をも与えられている。

アシュラムは、教会の祈りから出発し、祈りをもって終了する。そして更に一年、あるいは数年、十年、二十年、それ以上の年月への祈りへと進展して行く。その祈りの中心には、復活のイエス・キリストが共におられるのである。教派、教会の粋を超え、キリストにあって一つとされている。その命のきずなは、アシュラムにおいて強く、豊かに体得され続けている。

先代の信仰の諸先輩たちは、私たちに讃美、祈り、瞑想の良き伝統を残してくれた。それらが十二分に活用されている一つの場がアシュラムである。

私たちに与えられている生命の書である聖書に聴きつづける時、色々な国々、民族、個人の思い、深い罪の現実に私たちは直面する。

しかし、その中で、選ばれた人たちが、悔改めの祈りを、次々と捧げ続けた。旧約聖書続編の中に「マナセの祈り」が記されている。そこに忘れられていない一句がある。「罪人のこの私に、回心の恵みを与えてくださいました」（第 8 節 6）

神の命に生かされたサムソンの姿を思い浮かべ、私はアシュラムの恵みに感謝するのである。

（日基教団夜久野教会牧師）

霊想

「神の賜物を燃えたたせよう」

日本バプテスト連盟
港南めぐみキリスト教会牧師
本多　英一郎

「そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように勧めます」（テモテ第二・一：六）。

パウロが愛する信仰の子テモテにかいたことばであります。パウロの宣教によって祖母ロイスと母エウニケに宿った信仰は、やがてテモテに宿りました。その信仰は神からの賜物でありました。その信仰の炎を再び燃えたたせるようにとパウロはテモテを励ましているのです。「再び燃えたたせよ」という背景には、テモテの信仰の炎が消えかかっていたことが考えられます。今、この手紙を書いているパウロは福音のゆえに獄中にあり、時代は、福音に敵対する教えがはびこり、人々の心はまどわされ、俗悪な無駄話がガンのように広がり、多くの信者が真理の道を踏み外し、復活はもう起こったと言う人々に信仰をひっくりかえされる―そんな時代でありました。だからパウロは、神の賜物である純真な信仰をしっかり保つように励ましているのです。人の心と身体は連動します。体調不良の時は心もうつ向き加減にあります。「水ばかり飲まないで、胃のために、また、度々起こる病気のために、ぶどう酒を少し用いなさい」とパウロが心配しているところを見ると、テモテは病弱であったようです。おまけに師であるパウロは今獄中にある―。意気消沈しているテモテの様子が目に浮かびます。「宿る」というのは、青年時代にはクリスチャンだったとか、苦しい時の神頼みで一時は教会生活をしたけど、今はすっかり遠のいてとか、ではなく、「腰を落ち着けて定住する」という意味です。今の時代は、迫害がそれほど激しくないのに、どうも信仰の腰がどっしり落ち着いていない信者が多いのではないでしょうか。それでは教会形成がままなりません。

パウロはテモテに、時代は悪い、信仰は萎えがちな時代であるが、だからこそ、腰の据わった信仰を再び燃えたたせなさい。と励ましているのです。機械や道具は放っておくとさびつきます。信仰も放っておくとさびつきます。下火になり、ついには消えてしまいます。たえず信仰の炎を燃やし続けるためにはどうしたらよいでしょうか。アシュラムです。みことばをいただき、静かに祈り、聖霊の息吹きにふれることです。私達が今いただいている信仰は誰から受け継いだものでしょうか。そして誰に伝えてゆくべきものでしょうか。今は禁教の時代ではありません。平和な時代に燃えない信仰が、どうして迫害や苦難の中で燃えることがありましょうか。

パウロは信仰を火にたとえています。火は燃え続けてはじめてその役目を果たします。「燃えたたせる」という意味です。炎をかき立て、燃え続けさせると目立ちます。信仰の炎をかき立て、燃やし続けることは、信仰を鮮明にすることです。初代教会の時代は、信仰を鮮明にすること、キリストを証しすることは、殉教につながることでした。時代によって、国によって、それは今日もそうです。実際、テモテはパウロと共に投獄の苦難も味わっております。パウロから「神の賜物を再び燃えたたせなさい」と言われた時、テモテの心の中に「殉教」の二文字が浮かんだでありましょう。

戦後六十五年、日本人は平和惚けしていると言われておりますが、霊の戦いにおいても油断は禁物です。神の賜物である信仰、誰かが私たちに伝えた信仰の炎を、いつも鮮明に燃えたたせましょう。毎日、みことばの食卓にあづかり、祈りにおいて主と交わるという地味な生活が信仰の炎を燃えたたせます。

イエス・キリストは、私たちに「密室の祈り」を教えておられます。（マタイ6：6）密室とは物理的空間ではありません。四方と床は閉ざされていても、上には無限の空間（天の窓）が開いているところです。忙しくて祈る時間もないという人がおりますが、祈らないから忙しいのではありませんか。ダビデはこう祈っています。「主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いて下さい。朝ごとにわたしは御前に訴え出て、あなたを仰ぎ望みます」（詩編5：4）私は皆さんに「朝一番の主の祈り」をお勧めします。みことばを読んで味わう（霊の食卓にあづかる）ことに関しても、朝、バタバタと掻き込んだり、寝坊をして、食べないままで家をとび出すような、この世の食卓のあり様を霊の食卓にまで持ち込まないようにしましょう。アシュラムは主が用意を整えて、私たちを待っておられる。祈りとみことばの食卓であります。

立証

『関東アシュラムに感謝』

函館栄光教会キリスト教会
片山　由美子

昨秋長年の念願であった関東アシュラムへ出席することができました。

おおきな恵みを受け、心より、イエスは主である、と賛美することができ感謝です。私には、3人子供がおりますが、一番下の息子が、生後まもなく発熱し　その後難病性のてんかん発作に襲われ、昼も夜もなく、まるで手のひらに生卵を抱えているような状態での子育てでした。クリスチャンであった主人と教会に行き始めた頃でもあり、あまりよくわからぬまま受洗を致しました。上の二人の娘たちは、2歳と4歳で弟に母親を取られた状態でしたが、息子は過敏で夜は寝ず、ほんのちいさな事で発作は起こし、こちらもなにがなんだかわからず、娘たちが小さかろうがかまわず手伝ってもらっていたものでした。今その年齢の子供をみると胸が痛みます。そのような中で娘たちは育ち親元から離れ、私たちは自分たちの親を見送り、息子の賢治も施設に入所することができ、私は思いがけず、この4年ほど静かな教会生活を送ることができるようになりました。昨年長女が結婚する時、式は室蘭でしたので、私の頭には今までの息子の公の場でのハプニングがドンと暗雲のごとく膨らみ函館に置いていこうと思ったのですが、娘たちが、なんとしても弟は出席させて欲しい、わめいても騒いでも構わないと強く申し出、結局息子をよく知る友人たちが、息子の傍に付いて式の間見てくれました。娘にすると、この弟と一緒に育ったというところが、一番の自分のプロフィールだったのでしょうね。改めて娘たちを育てたのは息子であったと思う次第でした。それに比べ、私はというと、これまでの小さな出来事に心悩ませ、全て神様が備えて導き守って下さっています、感謝します、といっても思い煩いがすぐとって代わりました。このような信仰生活の中でもやもやした思いが心に住み着き、そのような思いのままアシュラムに行きました。アシュラムでは、聖書の御言葉の数々が胸に迫り、いろいろな方のお話に心打たれました。このような私でもイエス様のほうでしっかりと捉えてくださっている。思い煩いは明け渡すことができますように、そして私の周りの方のためにとりなしの祈りができますようにと心から思わされるアシュラムでした。なにもかも心安らぎ、開放感と、そして食事が噂の通り美味しかったです。関東アシュラムに心より感謝いたします。沢山の方が参加しますようにとお祈りいたします。

第2回 函館栄光キリスト教会 ミニ・アシュラム報告

佐々木　雄次

当教会のミニ・アシュラムは、一〇月一〇、一一日、助言者に木部安来先生をお迎えし、三五名（うち他教会からは五教会、一〇名）が参加して、開催されました。わたしたちの教会は、昨年からミニ・アシュラムを再開したのですが、そのためにさまざまご尽力くださった木部先生をお迎え出来たのは、本当に感謝なことでした。

先生は、初めの日、「新生の体験とクリスチャン生活」と題され、交通事故に遭い、入院している時、ヘブル書十二章五、六節の「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」という御言葉を示され、献身した。志はもっと以前からあったのであるが、喫煙の習慣を断ち切れず、躊躇していた。ところが、入院したため、煙草からも解放された。すべてのことに摂理がある、と話されていました。二日目は、「目標を目指して」という題で、信仰者はそれぞれ異なった人生を与えられているが、各々のゴールを目指し、日々悔い改め、祈りつつ走ろう、とお語りになりました。

静聴の時は、一日目、Ⅰペトロ二章一節～一〇節、二日目、ヨハネ一五章一節～一七節を黙読し、二日目には、分かち合いもなされましたが、「普段、時間をかけて聖書を読むことがあまりなかったので、とても恵まれた」「他の人から自分とはまったく違った感想が語られ、御言葉の豊かさに感動した」などの感想が寄せられました。また、開心の時と祈りの細胞では、皆が心を開

き、ニードを語り、祈り合うことができたのでしょう、充満の時には、全員が証しや感想をのべましたが、「普段、なかなか言い表すことができず、胸のつかえになっていた課題を告白し合い、祈り合うことができ、感謝であった」、という趣旨の発言が多かったです。ヤコブの手紙五章一六節には「罪を告白し合い、互いのために祈りなさい」とありますが、多くの方が「罪の告白と執り成しの祈り」の必要を感じている、と思いました。そして、アシュラムではこの御言葉が実践されている、とも思ったところです。今後も、日本アシュラム連盟のご支援をいただき、当教会の大切なプログラムとするだけでなく、地域の他教会にも呼びかけ、「罪を告白し合い、互いのために祈り」、「イエスは主である」と言い表す喜びを共有していきたいと願っています。

第48回 関東アシュラム報告

安藤　脩

関東アシュラムも48回を数える事が出来ました。山崎製パンの御好意で、今年も箱根山荘で開催されました。

開催日時・9月13日（月）～15日（水）主題は「神の賜物を燃え立たせよう」Ⅱテモテ1章3～14節で、助言者として本多英一郎師をお迎えしました。

アシュラムの恵みの豊かさは、主のみ前にどれだけ真実に心を開くかによって決まるといってもよいでしょう。今回の開心においては杉本和生師が、死にたいほどのいじめに遭った子ども時代の証をされました。解決のきっかけは、主が「彼らを赦して下さい。彼らは何をしているのか分からないのです。」との御言葉に導かれて祈り始めた祈りだったとのこと。霊の目が開かれると、天の軍勢に囲まれているのが見える。心の戸を開き、心の深くに主においでいただきましょう。との導きに、多くの方が開心しました。

助言者の本多師は、今治教会で6年奉仕し、榎本アシュラムのメンバーでもあるが、富山アシュラムを引き継いで導き、現在は港南めぐみ教会を牧会しておられる。日本アシュラムであろうとなんらの違和感なく、同じアシュラムの友としてご奉仕下さり感謝であった。本多師の教派やグループにとらわれない性格は、慶長のローマ使節・支倉常長の一行4名の中の一人、黒川六右門が信仰のルーツであり、御自身もカトリック中町教会で幼児洗礼を受け、自覚的な信仰は、プロテスタントのマクシミラン宣教師のバイブルクラスに出るようになり、18歳の時、再洗礼を受けた等の信仰の歩みにあるのだろうと感じました。

福音の時では、アシュラムの目指すところは「明け渡しとみ言葉である」と語られた。「心の目を開いて下さい」と祈ることにより、聖書を読むのが楽しくなる。また「教会の成長は、腹の据わった信徒が何人いるかによって決まる」「聖書を読むことがキリスト者の基本」「密室が目的ではなく、そこで主に会うことが大事」等、多くの心に残るメッセージが語られました。

ファミリーアワーでは、長年委員として奉仕くださった中村四郎兄（新宿西教会）の追悼式から始まり、委員会報告や情報交換がなされると共に、今後の参加者増加と若者参加をどのようになすべきかが検討課題となりました。

各地区アシュラム予告

●第42回城北アシュラム
とき　'11年2月11日(金)
ところ　池の上キリスト教会
助言者　千代崎備道師

●第18回東京新生教会アシュラム
とき　'11年2月19日(土)～20日(日)
立証者　森脇弘隆兄

●第49回関東アシュラム
とき　'11年9月19日(月)～21日(水)
ところ　山崎パン箱根荘
助言者　岡山敦彦師

〒一八一―〇〇一一　三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一―四五五八